

ゆったりとした時の流れの影に厳しい現実

I T U C ミャンマー事務所・所長 中嶋 滋

「殉国の日」に思ったこと

ミャンマーでは7月19日が休日である。この日は「殉国の日 (Martyrs' Day)」と呼ばれ、国父として今も尊敬を集めているアウンサン将軍が暗殺された日だ。将軍は1947年7月19日朝10時半に暗殺されたが、その時間になると、ヤンゴン市内のあちこちで黙祷が捧げられクラクションが鳴らされた。私はF T U M (ミャンマー労働組合連盟) の女性委員会に参加していたが、その場でも10時半に司会者が呼びかけ参加者全員が黙祷を捧げた。その会場に向かう途中、N L D (国民民主同盟) が小型トラックを改造したバスを借り上げ、それに党旗を掲げ党員や支持者を分乗させ集会に向かう準備をしているところに出くわした。バスの数は5～6台だったが熱気に包まれていた。N L Dの党旗は赤地に黄色でデザインした闘う孔雀 (fighting peacock) を染め抜いたものだが、この日はそれと共に黒地に黄色の闘う孔雀を染め抜いたものが使われていた。

地元紙によれば、将軍が埋葬されている霊廟で行なわれた公式セレモニーは副大統領参加のもとで執り行われたが、会場に一般の人々が入り殉国した将軍を偲び讃えることが出来るようになったのは今年からだと言う。霊廟だけではなく将軍の銅像が建てられている将軍ゆかりの場所で集会がもたれ、全国で数千人が参加したと報道されている。これも民主化進展の証だという。将軍の娘であるスーチーN L D党首は、テレビインタビューに答

え「この日は殉国者の生命から学ぶ機会」であり、「例えば、何故わが国が今日ようになったのか、また私たちが犯した過ちは何だったのか。私たちは殉国した人々を忘れてはならない」と語った。



「殉国の日」に関する新聞報道

ミャンマーの政治的挑戦は後退することはないだろうと言われている。そのことを示すためであろうか、国営放送は、アウンサン将軍が暗殺される6日前に語ったという次の言葉を使った。「ビルマ人はすべきことをしないことにたけている。改革に関してはたけていない。——しかし互いに争い合うことにはたけている」、「ビルマ人は何かに失敗すると思ったらあきらめる。この心根を変えねばならない。我々が何かをはじめようとするなら、このことを成し遂げねばならない」と。

党首が将軍の娘である故か、この日のN L Dの取り組みは抜きん出ている。彼女自身が何回も語っているように「アウンサン将軍の娘」であることが彼女の最大の政治的セールスポイントであることは間違いない。大統領になる意欲を公式表明

した彼女が、このセールスポイントをフル活用することも不思議ではない。「国軍は私の父がつくった。だから国軍に親しみを持っている」といい、国軍記念日を将軍たちと肩を並べて祝賀した彼女を批判する声は決して小さくない。彼女が大統領になるために必要な憲法改正に向け国軍指定議席の賛同確保が不可欠であるとしても、国軍への急接近に納得できない人は多い。

労働組合員の多くは、民主化の中身とプロセスを巡ってのまともな論議を期待している。例えば合法的に労働組合をつくっただけで執行部全員が解雇される事態がまかり通っていること、義務教育が事実上なく多くの子どもが教育を受けられないこと、どこに行っても目にする児童労働、これらの深刻な問題を解決するためにどうするのか。他にも、安全な飲料水の確保、下水道整備、ゴミ・環境問題の解決、交通行政不在の混乱解決——。課題山積だが、これらを巡る議論は不在である。これらの問題解決への取り組み姿勢を示すことの方が、はるかに強力なセールスポイントであることに早く気づいてほしいと多くの組合員が望んでいる。

軍政と文化、厳しい現実

7月22日は満月を祝う仏教の特別日で休日であった。満月を祝う宗教的な行事が行われる特別日は年に数回ある。今年の場合、「殉国の日」とこの日が土日を挟み4連休となった。この機会を捉えて、遠隔地の農村部に農民組合結成の働きかけに出かけた。初日の午前中は先述のようにFTUM女性委員会に参加したので正午過ぎに出発し、宿泊地バガンに着いたのは22時過ぎ、四輪駆動車で10時間の行程だった。2日目は、古都バガンでの観光を楽しんだが、歴史的建造物が軍政時代に十分な学問的な検証もなしに有力者の個人的な思いのために修復された事実を目の当たりにして驚かされた。現世での功德が来世の豊かさを保証す

ると広く信じられているミャンマーでは、特に宗教的建造物などへの寄附が好まれるらしい。そんなことで、考古学的な考察なしに多くの仏塔が素人目にも明らかな誤った修復がなされ、仰々しく誰それの寄附によったと告知版が立てられている。仏塔自身の歴史的由来などの説明は抜きである。現在はユネスコの協力で補修作業が進められているが、世界に誇りうる文化遺産を台無しにした罪は償えず、軍と文化は同居できないことを改めて感じた。

3日目、バガンから車で1時間のパコック市近郊の10余りの村々から約40名の農民たちが集まり、抱えている様々な問題を聞かせてくれた。その最たるものは軍による土地収用で、補償も使用料も一切なしでなされた。最近、国会で問題にされ特別委員会の議論を経て、議長が、建築中を含め建物がある土地を除き全ての土地を近日中に所有者に返還すると発表した。現場では異なる事態が起っており全く信用できないと、農民たちは口々に語った。その他、護岸がなされていないが故の増水による土地の流失、灌漑施設不整備の故の耕作不能や収穫激減、肥料・農薬・農業機械の共同購入などの組織づくり、貧困と教育問題など多岐にわたる意見交換がなされた。その中で日本のODAによる支援にも触れられた。

私たちはFTUM傘下の農民組合の活動を紹介し、農民が団結し運動を展開することを抜きに根本的解決は難しく、組合結成の必要性を訴えた。午前中の会議の後、現状を見てほしいとの要請を受け、急遽駆けつけたNLDの国会議員とともに船で40分かけて大河イヤワディ川の土地の流出が激しい中洲の島に渡り、農民たちが抱えている諸問題の現状をみた。全ての村で外国人が初めて来たということで大歓迎された。足を踏み入れた時、自然と共生してゆったりとした時間の流れとともに暮らす「豊かさ」を感じたが、生活実態を見聞きするにつれそんな甘いものでないことを思い知らされた。